

<概要>

東北の子どもの展示—「灯ろうで描く私たちの弘前」展—

蝦名敦子（弘前大学）

本研究は、今年 2015 年 8 月に行われた小学校児童の灯籠作品の展覧会「灯ろうで描く私たちの弘前」展について紹介し、改めて子どもの作品展示のあり方について考察したものである。本展覧会は一般に学校で行われる展示とは異なる提案をした。学校では児童の学習した成果として作品を展示することは多いのであるが、本展覧会は、児童の作品を使用するものの、新たなコンセプトに沿って展覧会が企画されたのである。すなわち、弘前城をメインに東西南北の方角に実在する名所が描かれた灯籠を配置して、弘前の町が表現された。3 回行われた題材の灯籠作品を用いて、学校の外に展示場を借りて展覧会が開催された。その様子を振り返りながら、2011 年、2012 年、2014 年と 3 回にわたって題材が発展・展開した要因に言及しつつ、子どもの作品展示の効果について考察する。

灯籠製作の題材が 5 年間に繰り返され、最終的に展覧会開催にまで至ったことになる。一つの題材がこのように継続的に展開していくことは、当初全く予期していなかった。児童は学習されて身についた技法を応用して、一層大きく複雑な形や、新たに「動く」形に発展させていった。しっかりと習得された技能が身につくと、児童の造形活動も自発的に向上していったのである。基礎となる技能の習得と、適切な材料や用具の選択が、子どもの表現を充実させている。

本展覧会は、一連の題材が反映されたコンセプトにより、新たな意味が付加された展覧会となった。その新たな意味とは、子どもの作った灯籠作品を見せるだけではなく、弘前の町をねぶた運行して動く灯籠から、静止した灯籠により作品自体をよく見せながら弘前の町を表現したという点である。題材 1「ようこそ、わたくしたちのまちへ」から、最後は「灯ろうで描く私たちの弘前」展へと、題材と展示のコンセプトが一貫して一つの完成をみた。その結果、子どもの作品であるが、幅広い年代に受け入れられた。作成した児童は既に中学生（1 年と 2 年生）になり、中には自分たちの思い出のような受け止め方もあったが、保護者や一般の市民、観光客に至るまでねぶた祭り期間中の最中、関心が寄せられた。また予期していなかったのであるが、特に学校に入学する前の小さな子どもたちに人気があった。彼らはミニ灯籠を実際に担いで歩き回ったり、最後には非常にほしがった。作品は展覧会終了時にそういう方々に差し上げて役立てられた。また大型の弘前城天守の灯籠は、介護施設で展示され、祭りを見たくても見ることのできないお年寄りの方々に楽しんで頂くことになった。子どもの作品は作りっぱなしになることも多いのであるが、それらの作品が活かされて新たな展示場所を得て、さらに味わって頂くことになったのも展覧会の効果である。

子どもの作品には、大人の制作に負けない独特の魅力がある。それは子どもの感性が十二分に発揮された充実した作品であればこそであり、子どもならではの表現の豊かさがあるからであろう。そこには、教材化が重要な役割を果たしたのである。